



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	大学教授職のライフコース：活動の自己分析
Author(s)	藤原, 幸男
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(84): 143-150
Issue Date	2014-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31998
Rights	

大学教授職のライフコース —活動の自己分析—

藤原幸男*

Life Course of Teaching Profession in University

FUJIWARA Yukio

はじめに

大学教授職⁽¹⁾の仕事には、教育、研究、管理運営、社会貢献の4つがある。大学教授職にとって、「活動をととしてキャリアを自己形成することが重要になる。

研究面では、出身大学の研究室との共同研究、関係分野の研究会での活動、学会活動との関わりが重要になる。さらに教育方法学においては教育雑誌への原稿執筆、教師向けの本や研究成果物の出版などの出版機会の確保が重要である。そこでは出版社・編集者との関わりが重要になる。研究論文の継続的発表は昇任の業績評価において不可欠であるばかりか、自己の研究の軌跡を振り返り展望を切り開くのに必要である。教育面では、授業実践報告はFD活動において重要になってくる。これらの活動は、年齢や職階の上昇によって変化していく。ライフコース⁽²⁾の中で活動を見ていく必要がある。

本稿では、教育方法学という教育実践に密着した研究領域を専攻し、助手採用から教授退職まで大学教授職の生活をしてきた自己の活動を取り上げて分析する。

以下の叙述では、ライフステージごとに時期を、(1)前史(～1976年3月)、(2)助手・専任講師時代(1976年4月～1982年3月)、(3)助教授時代(1982年4月～1992年9月)、(4)教授<前半>時代(1992年10月～2002年3月)、(5)

教授<後半>時代(2002年4月～2014年3月)に区分する。

なお取り上げる著書・論文等は全てではない。詳細な著書・論文等は本紀要掲載の「退職者紹介(藤原幸男)を参照されたい。

1. 前史(1968年4月～1976年3月)

私は1968年4月に広島大学教育学部小学校教員養成課程(教育学専修)に入学した。教育学の専門教育では、藤井敏彦助教授の講義でマカレンコの集団主義教育に触れ、魅了された。卒論は虎竹正之教授のもとで「コメニウスの教授学思想と汎知学思想」を書いた。藤井敏彦助教授に誘われて、広島大学教育方法学研究室の大学院生と一緒に広島県北の細美田鶴枝教諭(庄原市立敷名小学校)の授業を見て感動し、教育学専修の同級生(阿部好策)と1年先輩(折出健二)と一緒に、1972年4月に、学習集団の研究で著名な吉本均教授を慕って広島大学大学院教育学研究科教育学専攻修士課程(教育方法学講座)に進学した。

大学院では、東ドイツの教育心理学者J. ロンブシャーを中心として授業における知的能力の発達についての研究を行なった。合わせて、東ドイツにおける問題探究授業論の研究を推し進めた。両者の研究成果は「知的能力の発達と集団思考」(吉本均編『集団思考の成立とは何か』明治図書、1975年)に結実した。

広島大学教育方法学研究室は広島大学グループ

* 琉球大学 教育学部 学校教育講座・教育実践学教室

として長年にわたって「授業と学習集団」研究に共同で取り組んでおり、大学院生も深く関わっていった。私も広島県内の研究校・実践校などに授業研究に行き、そこでの授業観察と検討をとおして「授業と学習集団」の実践的研究を深めるとともに、他方で、それらの実践成果を取り入れながら「学習集団研究」についての著書を共同執筆していった。その成果の一つが、吉本均・広島大学教育方法学研究室『現代学習集団の構造』（東方出版、1975年）である。同書では、「歴史的過程としての授業」、「教授＝学習過程としての授業」を執筆した。また、吉本均の個人誌『学習集団研究』第4集（明治図書、1975年）に、「学習集団研究の海外の動向4／授業における訓育の構造—R. ルドルフを中心にして—」を共同執筆した（折出健二・上野ひろ美との共著）。共同で取り組んだこれらの経験がその後の研学生活の糧になった。

2. 助手・専任講師時代（1976年4月～1982年3月）

1976年4月に琉球大学教育学部小学校教員養成課程教育学専修の助手に27歳で採用された。首里キャンパスでは研究室が絶対的に不足していた。プレハブ研究室も増設されたが、私は教育学部棟2階の、安谷屋良子教授（教育哲学）との二人部屋であった。安谷屋教授が演習や卒論指導をしていたその奥の隅で、本を読み、原稿を書き、授業準備をした。

個人研究は、一方では、東ドイツの教授学・学習論の研究を継続していった。東ドイツ教授学については、「東ドイツ教授学に関する研究（1）—『授業における指導の個別化』をめぐって—」（『琉球大学教育学部紀要』第20集、1976年12月）、「東ドイツ教授学に関する研究（1）—授業方法研究の動向—」（『琉球大学教育学部紀要』第21集、1977年12月）、「1965年前後東ドイツの問題探究授業論」（『九州教育学会研究紀要』第6巻、1979年6月）、東ドイツ学習論研究については、「知的能力発達と授業構成—J. ロンプシャーの研究経過をたどって—」（『学習集団研究』第7集、1979年9月）を書いた。

他方で、「教育原理Ⅱ」などの授業に役立てるために、人物・団体を取り上げて戦後日本の教育

実践史を論文にしていった。「東井義雄の授業実践」（『琉球大学教育学部紀要』第21集、1977年12月）、「東井義雄における教育実践の構造—『生活の論理』の検討を中心に—」（『琉球大学教育学部紀要』第22集、1978年12月）、「学習集団による授業改造—60年代授業研究・実践の—典型として—」（『琉球大学教育学部紀要』第23集、1979年11月）、「教科内容の創造と授業実践—教科研社会科部会の研究・実践を中心に—」（『教育方法11、現代授業理論の争点と教授学』明治図書、1980年4月）、「問題解決の方法と能動的学習—仮説実験授業の場合—」（吉本均編『講座・現代教授学、第3巻、授業展開の教授学』明治図書、1980年）と書いていった。

民間教育研究団体は、教育学専修の同僚の浅野誠（日本教育史・生活指導）に誘われて、沖縄生活指導研究会に参加した。同会は沖縄の場で民主的な教育実践（授業・生活指導）を共同追求してきており、多くの教師が結集していた。私は浅野誠に寄り添って、会誌の編集に加わり、授業記録・実践記録とその分析検討を行ったり、座談会に参加したりした。会誌に、授業指導についての論文も書いた。「教材・発問と授業展開」（『民主的な子を育てるために』第8号、1976年12月）、「教師のための授業づくり入門」（『民主的な子を育てるために』第12号、1978年12月）、「授業の仕掛けは教材・教具から」（『民主的な子を育てるために』第14号、1980年1月）である。

大学の授業実践の実践的研究については、浅野誠に誘われて、1976年後半から浅野（生活指導）・砂川勝信（英語科教育）・藤原（授業論）の3名の共同による授業科目「授業分析」（1977年度前期）の事前研究会と本実践に取り組んだ。具体的な教材（「短歌の授業」「重さの指導」「マット運動の連続技づくり」）を取り上げて、指導案づくり、模擬授業、授業分析を行なった。

また、教育学部をあげての教育方法改善プロジェクト（1979～1980年度）に参加し、教員養成カリキュラム部会の幹事として活動し、その成果を「琉球大学における教員養成の意識分析（2）—カリキュラム—」（西村貞雄との共著）（『琉球大学教育学部紀要』第24集、1980年12月）にまとめた。また個人の実践報告として、「1980年

度前期『教育課程』（講義）の課題レポート『児童読物の比較検討』の分析』（『教員養成のあり方についての総合的研究および施行（第2年度）』、1981年3月）を報告した。この発展として、「大学の授業における教育内容論の教授—『民話教材の比較検討』—」（『琉球大学教育学部紀要』第25集、1981年12月）を書いた。

沖縄教育については、教育学専修の共同研究の中で、「戦前沖縄における師範附小訓導の教育実践」（阿波根直誠編『沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究』、1980年3月）を書いた。さらに、浅野誠を研究代表者とする科研に参加し、沖縄派遣教育指導員・沖縄教員へのアンケート調査などを実施し、浅野誠編『戦後沖縄の初等・中等学校における教育実践（主に授業と生活指導）に関する実証的研究』（1981年3月）にまとめた。これらの研究が、戦後沖縄教育の歴史的研究の基盤になった。

教師向けの論稿としては、明治図書江部編集部長からの依頼で『学級づくりの年間計画事例集、小学1・2年』（明治図書、1980年4月）を書き、これを契機として、学級づくりについての共著・雑誌原稿を書いた。

上記のように、助手・専任講師時代には、大学院での個人研究を継続しながら、他方で新しく戦後日本教育実践史の研究へとフィールドを広げていった。教育方法学研究室から少しずつ自立をしていった。さらに、教育学専修の同僚、浅野誠の誘いかけがあって、沖縄生活指導研究会で様々な実践に出会うとともに、その記録作成と分析、現場教師との共同授業などに取り組んでいった。その延長上で、自らの大学授業の実践的研究、戦後沖縄教育実践史の研究へと研究領域を広げていった。こうした多様な領域での試みがのちの研究・実践の基礎となった。

若い教員を見ると、就職困難な状況の中で、大学教員に就職できて一安心して研究が停滞する人がいる。このようにならないためには、新しい分野・領域に挑戦する意欲と行動が必要である。合わせて、地域・大学での教育実践研究に参加を促すような先輩教員の存在が不可欠である。先輩教員に誘われて地域・大学での教育実践に関わり、そこから刺激を得て、自己の教育実践研究に反映

させたことも、この時期の特徴である。

3. 助教授時代（1982年4月～1992年9月）

1982年4月に、琉球大学教育学部は西原町に統合移転した。ようやく24㎡の個人研究室が教員一人ひとりに確保された。当初は広々とした研究室もすぐに書棚に本が満杯になった。同時期に公務員合同宿舎に引っ越し、1室書斎を確保したが、周囲への配慮から大学で朝早くから午後5時まで過ごし、論文を研究室でも書くようにした。

この時期の個人研究で大きいのは、単著を出版したことである。大学院同期の折出健二の新著（『学習集団の指導過程論』明治図書、1982年8月）に刺激され、出版に向けて原稿執筆を開始し、明治図書から『教材文化と学習集団の指導』（明治図書、1983年8月）を出版した（400字詰原稿用紙換算350枚）。これだけ多くの枚数の原稿を書いたことは自信になった。続けて、単著『子どもの見方・とらえ方』（明治図書、1985年2月）を出版した（400字詰原稿用紙換算230枚）。内容的に浅いという批評もあったが、本にまとめることで子ども理解の認識を深め、子ども理解に立脚した授業指導論構築の基盤になった。前期に引き続き『集団づくりのための学級経営案、小学1・2年』（明治図書、1983年3月）の総論と実践分析を書いたが、単行本出版によって雑誌等の依頼原稿も増えてきた。

『教材文化と学習集団の指導』の出版を契機として、授業づくり論の創造についての試論を構想し、「授業づくり論研究ノート（1）—教授行為をめぐる諸問題の検討—」（『琉球大学教育学部紀要』第27集第1部、1984年2月）、「授業づくり論研究ノート（2）—仮説実験授業の授業づくり論—」（『琉球大学教育学部紀要』第28集第1部、1985年2月）、「授業における学習方法の指導（1）—授業における学習方法の構造—」（『国語教育評論』第6号、1987年3月）、「授業過程の構造—『授業づくりの新しい展開』研究ノート—」（『琉球大学教育学部紀要』第37集、1990年12月）などの論文を継続的に書いた。

これに続いて、戦後授業論の創造に意欲的に取り組んだ研究者の学説史を追うシリーズとして、「吉田昇の学習指導論」（『琉球大学教育学部紀要』

第38集、1991年3月)、「授業における集団思考の組織化—1971年以降の砂沢喜代次の集団思考論—」(『琉球大学教育学部紀要』第39集、1991年11月)、「学習集団づくりを基底とした授業指導論の形成過程—1959～71年における吉本均の授業指導論の展開—」(『琉球大学教育学部紀要』第40集、1992年3月)、そして「学習集団づくりを基底とした授業指導論の形成過程(2)—1971年以降における吉本均の授業指導論の展開—」(『琉球大学教育学部紀要』第42集、1993年3月)を書いた。

東ドイツ教授学については、引き続き「L. クリンクベルグの授業過程論—認識過程の捉え方を中心に—」(『九州教育学会紀要』第12巻、1985年6月)、「東ドイツの問題探究授業論」(『九州教育学会紀要』第14巻、1987年6月)を書いたが、1989年11月ベルリンの壁崩壊、ドイツ統一に遭遇し、方向性を見失い、研究の継続を断念した。

学習集団研究については、大西忠治の個人誌に「『学習の集団的性格』をめぐる」(『国語教育評論』第3集、1984年6月)を書いた。研究の年間総括を依頼され、「学習集団研究の総括と研究課題」(『現代授業研究年鑑、86年版』明治図書、1986年6月)、「学習集団研究の総括と研究課題」(『現代授業研究年鑑、87年版』明治図書、1987年6月)を書いた。これを書く中で、これまで発表された文献を収集・年表化する必要があると感じて、研究文献リストを作成し、琉球大学教育学部紀要に継続的に投稿した。この時期に1958～1992年まで、次期に1999年までフォローした。依頼されて、「戦後『集団教育観』をめぐる論争」(『現代教育科学』1991年11月号)を書いた。歴史的に概観・展望する機会になった。

恩師吉本均の指揮のもとで、広島大学教育学方法学研究室の総力を挙げて取り組んだ吉本均編『現代授業研究大事典』(明治図書、1987年3月)、同編『新・教授学のすすめ、②、否定の中に肯定を見る』(明治図書、1989年7月)、同編『新・教授学のすすめ、③、教材解釈と発問づくり』(明治図書、1989年7月)を書いた。

また個人的つながりから、歓喜隆司・田代高英編『教材の構成と展開』(第一法規、1984年4月)、坂本光男・折出健二編『講座・中学生問題、第3

巻、学習に取り組む集団をどう形成するか』(明治図書、1984年8月)、折出健二・坂本光男編『講座・「できない」子に挑む、2、学習の相互援助をどう組むか』(明治図書、1985年3月)、浅野誠・大畑佳司編『講座・小学生問題、5、小学生をどう脱皮していくか』(明治図書、1987年8月)などに分担で書いた。

沖縄教育については、浅野誠らの科研共同研究をもとに、「戦後沖縄の現職教育に関する実証的研究(1)—夏季認定講習講師へのアンケート調査を中心に—」(『九州教育学会研究紀要』第9巻、1982年6月)を書いた。さらに、『沖縄大百科事典』(沖縄タイムス社、1983年5月)の項目執筆、村上呂里との共同研究、『沖縄をテーマとした国語読本の編成に関する研究』(1991年3月)、同第2集(1992年3月)の共同執筆をした。

大学の教育実践の実践的研究については、「『視聴覚教育』におけるスライドづくりの実践」(『琉球大学教育学部紀要』第40集、1992年3月)を投稿した程度であった。

沖縄の教育実践との関わりでは、一つには、那覇市立教育研究所と沖教組那覇支部の共同で漢字指導に取り組み、授業書を軸とした授業研究を行なった(『基礎学力向上方策報告書、国語』1981年3月～1985年3月。これについては経緯と総括を、「復帰後沖縄における学力問題の展開」、あけもどろの会編『ことば・生活・教育』ルック、1996年3月)に書いた。沖縄生活指導研究会での活動の中で『沖生研会員通信』や研究会誌での論稿・実践記録分析を行なった。さらに、沖民教編著の分担執筆も行なった。

科研(研究代表者・藤井敏彦)「乳幼児の道徳性の発達に関する総合的研究」(1986～88年度)の中でコメニウスを担当した。これを契機として「コメニウスにおける幼児教育論の展開」(『琉球大学教育学部紀要』第33集、1988年11月)、「コメニウスの道徳教育論」(『琉球大学法文学部紀要・社会学編』第31集、1989年3月)を書いた。この執筆過程で藤田輝夫、井ノ口淳三と出会い、それが藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』(法律文化社、1992年4月)の「道徳教育」執筆につながった。

この時期は前期の継続研究を行なうとともに、

研究面での新展開を図った。人とのつながりの中で執筆機会を与えられたり、新たな共同研究へと向かったりして、「展開」をしていった時期だと総括できる。

4. 教授<前半>時代(1992年10月～2002年3月)

1992年10月に教授昇任した。教授になると輪番で教室主任をする。学部の諸委員会で委員長・副委員長の役職をする。採用・昇任に関わる教員選考委員会委員をする機会も多くなる。教室・学部運営の面で忙しくなった。

教育面では、1997年4月から学校教育教員養成課程(学生定員150名)が発足し、教育学専修は学生定員10名となった。課程全体での入学試験から専修別入学試験に移行した。1999年4月には同課程は学生定員100名に縮減され、教育学専修は学生定員6名に縮減された。このことにより、授業は多人数の教職科目と少人数の専門科目に二極化した。

教授<前半>期における個人研究の成果は、一つには、身体論・関係論を軸にして授業指導論を構想したことである。これについては、「身体論的・関係論的授業指導論の構想」(『琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第1号、1993年11月)、「身体に着目して学習をつくり直す」(共同研究グループ『ゼミナール・生活指導を変える』青木書店、1994年7月)、「身体と学び—その実践史的検討—」(子安潤・久田敏彦・船越勝編『学びのディスコース』八千代出版、1998年12月)の一連の論稿がある。後者の二つは、生活指導研究者との共同活動の中で検討を受け洗練化していった。

身体論・関係論を軸にして授業指導論について個別に考察したのが、「林竹二の授業における身体と癒し」(『琉球大学教育学部紀要』第49集、1996年10月)である。

二つには、授業と学習集団・集団思考を歴史的に深めたことである。これについては、「学習集団づくりを基底とした授業指導実践の展開—1960～1970年代前半における全授研広島グループを中心として—」(吉本均編『教育方法学研究における「知の枠組み」に関する学際的・総合的研

究」<科研中間報告書>、1995年3月)、「戦後教育実践における『授業と集団』の問題」(同上最終報告書、1996年3月)、「授業における集団思考と学習集団—その歴史的検討—」(『生活指導』1997年5月号)、「戦後日本の授業研究史における集団思考概念の検討」(『琉球大学教育学部紀要』第51集、1997年11月)、「戦後授業研究における学習集団研究の成果と課題」(『琉球大学教育学部紀要』第56集、2000年3月)がある。全生研の新しい研究・実践動向については、「世界づくり・自分づくりを励ます授業と自主的学習活動の創造」(『琉球大学教育学部紀要』第44集、1994年3月)で書いた。

三つには、「授業と学習集団」についての文献リストの作成を継続して行ったことである。これについては、1990～1999年までの文献を年表化し、『琉球大学教育学部紀要』(第41集、1992年11月、第50集、1997年3月、第55集、1999年10月)、『琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第2号、1994年11月)に投稿した。

沖縄教育については、「国際化時代の沖縄における学校教育の課題」(竹田秀輝編『国際化時代・島空間の可能性の探求』沖縄時事出版、1994年4月)で現代的課題を整理した。

日本復帰後の歴史的展開については、「日本復帰後23年の沖縄における学校教育の展開」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第3号、1995年11月)、「復帰後沖縄における学力問題の展開」(あけもどろの会「ことば・生活・教育」ルック、1996年3月)、「平和教育と修学旅行」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第9号、2002年3月)を書いた。

教師教育については、教育学部教員有志と共同で、大学院生へのアンケート調査に取り組み、日本教師教育学会第4回大会(1994年10月29日)で発表した。発表原稿に加筆して学会紀要に投稿し、審査を経て掲載された(太田昭臣・小田切忠人・永津禎三・比嘉善一・藤原幸男「現職教員を受け入れている教員養成系大学院の教育に関する考察—修了生・在学生への意識調査をもとに—」『日本教師教育学会年報』第4号、1995年6月)。

個人の実践報告としては、「視聴覚教育」でのスライドづくりを取り上げて「身体・関係・共同

の創造と班共同制作活動—スライドづくりにおいて—」(『琉球大学教育学部紀要』第45集、1994年10月)、「班共同制作活動における班編成の問題」(『琉球大学教育学部紀要』第47集、1995年10月)を書き、「『教職の意義等に関する科目』の実践的研究—教師像・教職志望を中心に—」(『琉球大学教育学部紀要』第60集、2002年3月)を書いた。

この時期には、教育学科の教員と共同で1993年に沖縄教育学会を立ち上げた。年1回の研究大会を開催し、シンポジウム・自由研究発表を行なった。沖縄教育学会は財政上の理由などで2005年8月に閉会したが、沖縄県内の教育実践研究の拡大と深化に一定程度貢献したのではないかと思っている。

また、沖縄生活指導研究会の活動に関わり、『沖生研紀要』に論稿・実践記録の分析を書いた。全国生活指導研究協議会でも、第36回全国大会(1994年8月2～4日)で「対話・討論・討議の指導」分科会の、第38回全国大会(1996年8月1～3日)で「班とグループの指導」分科会の共同担当を務めた。全生研常任委員会編『メッセージ・学級集団づくり3、小学校1年、からだと心をひらく』(明治図書、1993年9月)の「解説」を担当し、「特集・学び—崩壊と再生」『生活指導』1999年7月号で実践記録の分析を行なった。以後中断してしまっただが、これらの活動が私の教育実践研究に影響を与えたと言える。

学会レベルでは、日本教育方法学会常任理事(2000年10月～2003年9月)となり、大会企画、紀要編集、40周年企画(『現代教育方法事典』の編集担当)などで多忙になった。

この時期は、前期の研究を深化・発展させた点に特徴がある。また年齢的に活動を担うことが求められ、多様な研究会・学会の活動に参加し、その展開・組織化に励んだ。

5. 教授＜後半＞時代(2002年4月～2014年3月)

教授＜後半＞の時期は教室主任、副学部長(2005年4月～2007年3月)の役職を受け持ち、時間的に過密で厳しかった。その中で良く取り組んだと言える。

また、学部教育組織の改革論議が続き、ようやく2009年4月に新組織に移行した。私は学校教育教員養成課程小学校教育コース教育実践学専修(学生定員28名、教員11名)に所属した。教育学・教育心理学・教科教育・教科専門の多分野から構成される教員スタッフのもとで、教育実践学専修はそれぞれの教室文化をすり合わせて新しくスタートした。授業・学生指導面で新しく創造していくおもしろさはあるが、生み出す苦労は多く、大変でもあった。¹³⁾

この時期の個人研究の成果は、一つには、学習指導要領、学力、学習指導について検討を行なったことである。学力については、日本教育学会第61回大会(2002年8月29日～31日。場所：福岡教育大学)の公開シンポジウム「学力問題を考える—何が問題であり、何をなすべきか—」提案の準備として「『ゆとり教育』改革と学力」(『琉球大学教育学部紀要』第61集、2002年9月)を書き、その後に「『学力低下』問題と学力形成」(『琉球大学教育学部紀要』第62集、2003年3月)を書いた。

国際学力調査PISAについて、「知識社会におけるリテラシーと学習意欲」(『教育方法35、学習意欲を高める授業』図書文化、2006年10月)、「知識社会におけるキー・コンピテンシーと学校教育」(『琉球大学教育学部紀要』第71集、2007年8月)を書いた。その上で学習指導要領を検討し、「2008年改訂小中学校学習指導要領における理念・考え方とその具体化の検討」(『琉球大学教育学部紀要』第73集、2008年8月)、「2008年改訂学習指導要領における学習指導の枠組みについての考察—『習得』・『活用』・『探究』を中心に—」(『琉球大学教育学部紀要』第75集、2009年8月)を書いた。これらの論稿は「教育課程」「教育方法」の授業との関係でどうしても書く必要があった。これらの研究をもとに、琉球大学教育学部附属中学校の校内研修会で「活用能力を育む授業の創造」をテーマに講話を行なった(2008年7月18日)。

二つには、沖縄教育の実態および歴史的研究への取り組みである。とくに2007年に全国学力・学習状況調査が悉皆調査で実施され、沖縄県が最下位となったことから、地元新聞社から総括的分析を求められた。新聞コメントを契機に、国立教

育政策研究所の公表データをもとに2007 - 2009年度まで3年間連続して『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第15号(2008年3月)、『琉球大学教育学部紀要』(第74集<2009年2月>、第76集<2010年2月>)に分析検討の論稿を書いた。

これとの関連で、日本復帰前沖縄の全国学力調査の検討の必要性に駆られて、「琉球政府時代沖縄の全国学力調査—資料概観—」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第17号、2010年3月)、「琉球政府時代沖縄の児童生徒の学力実態—全国学力調査(1956—1966)を中心に—」(『琉球大学教育学部紀要』第77集、2010年8月)を書いた。資料が散逸していて、那覇市立教育研究所・沖縄県立教育総合センター図書室に何度も行って資料収集したことが思い出になっている。

またこの時期、琉球政府時代(1952 - 1972年)の学校教育について、依頼を受けて市町村史に執筆した。史料があまりない中を編集室の係に資料を提供してもらい、一緒に学校・諸機関を訪問して資料収集しながら執筆したことも思い出となっている。「第4章琉球政府時代の学校教育、第4節教育課程、第5節現職教育」(『具志川市史、第6巻、教育編』うるま市教育委員会、2007年6月)、「琉球政府時代の学校教育」(『西原町史、第1巻通史編Ⅱ』西原町教育委員会、2011年9月)である。この発展として、「琉球政府時代以後の沖縄における理科教育地区モデル校の実態と実践研究」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第18号、2011年3月)を書いた。

集団思考研究については、「授業における集団思考の組織化」(『人間科学』第13号、琉球大学法文学部人間科学科、2004年3月)で、附属小学校での総論検討での着想をもとに新たな展開を図った。学習集団研究については、「学習集団を組織できる教師の力量形成とは」(『カリキュラムをつくる教師の力量形成』教育開発研究所、2006年6月)、「国語の授業改革と学習集団」(『国語授業の改革』第6号、学文社、2006年8月)を書いた。

その他、コメニウスについて「コメニウスの汎知学校における集団の視点」(『日本のコメニウス』第20号、2010年8月)を書いた。デジタルメディア時代の子どものためには「デジタルメディア時

代における子ども像の進化」(日本教育方法学会編『教育方法40、デジタルメディア時代の教育方法』図書文化、2011年8月)を書き、その発展で「学校教育は社会性の育成にどう向き合うべきか」(『体育科教育』2012年3月号)を書いた。総合的学習についても取り組み、「教科と『総合的な学習の時間』の関連の構成」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第12号、2005年3月)など、いくつか論文にした。

教師教育については、「教員の力量向上と教員養成教育の改革」(日本教師教育学会編『講座・教師教育学Ⅱ、教師をめざす』学文社、2002年10月)を書くとともに、「教師の苦勞と喜び—学生による聞き取りをとおして—」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第10号、2003年3月)、「『平和と教育』の授業実践—グループによるプロジェクト学習を中心に—」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第13号、2006年3月)などで担当授業の実践報告をした。

総括すると、この時期は学習指導要領・学力・学習指導の検討などテーマを拡張し、戦後沖縄教育についても新視点から研究を行なった。起承から「転」へと移動したといえる。

おわりに

私の場合研究テーマを複数もっていたので、東西ドイツ統合という事態に遭遇して東ドイツ教授学の研究を断念・放棄しても他分野・領域で研究を進めることができた。

時期ごとに見ると、いくつかシリーズ的に継続的な論稿を書いてきたがいつのまにか途切れてしまっている。今思うと、長期的展望をもって研究することが欠けていたとも言える。その反面、現実社会が要請している課題についてはその時々で機敏に取り組み、ある程度は応えることができたように思う。時局的対応、研究会やサークルでの実践検討が刺激になり、理論的・歴史的検討へと進むことも見られた。

大学教授職のライフコースという点で見ると、年齢や地位・職階の上昇に伴って、さらに人脈の広がりの中で「書く」機会が増えていったが、教育雑誌の原稿依頼の機会は少なくなっていた。原稿依頼に左右されずに研究テーマをしかか

り定めて長期的に研究を進めることが大事である。この様相はある程度見えてきたようである。

注

(1) 大学教授（杉原厚吉『大学教授という仕事』水曜社、2010年）、大学教員という表現もあるが、本稿では、大学教授職（有本章編『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部、2011年）という表現を採用した。

(2) ライフコースかライフヒストリーかの議論が

あるが、本稿では活動軌跡の意味でライフコースを採用した。なお、本稿と関わって、教育学研究者のライフコースとして、大田堯、竹内常一の2名を取り上げた『「戦後教育学の遺産」の記録（資料集 No. 1）』日本教育学会特別課題研究委員会「戦後教育学の遺産」研究会、2013年8月があり、参考にさせていただいた。

(3) 中村透「第2章第4節 教育学部、(1) 教育改革と教育組織構想の変遷」、『国立大学法人琉球大学60年誌』国立大学法人琉球大学、2010年5月。